

奥の細道漫遊紀行

《深川から大垣までの紀行録をブログ並びにホームページへ》



奥の細道の句碑を辿ろうと思いついたのは平成十三年で六十八才の時だった。

旅行が好きで毎年何回か車で主に甲信方面に行っていたが、そろそろ混み合う首都高速を通らずに、のんびり走れる「みちのくの旅」をメインにしようと思った。

そして、「みちのく」なら「奥の細道」と条件反射的に連想し、平成十三年秋に黒羽から白河、須賀川、福島まで辿ったのが最初である。

草加で江戸を振り返る黒像



翌年春に白石から登米まで、秋に平泉から山寺へ、その翌年には

最上川、出羽三山、酒田、象潟までと旅を繋いで行った。その間に奥の細道に関する本や藤原三代の歴史を調べたり、歌枕として詠まれた和歌を探したりしているうちにすっかり奥の細道にはまってしまう。みちのくを離れても越後路、北陸路と奥の細道を追い続け、また江戸から日光、那須方面にも足をのばし、句碑めぐりを始めてから5年後の平成十八年に結びの地、岐阜県大垣市まで辿ることになってしまったのである。

奥の細道には中・高校の教科書に出てくる有名な句が多くある。平泉での「夏草や兵どもが夢の跡」、五月雨の降りのこしてや光

堂」、最上川、川下りでの「五月雨をあつめて早し最上川」、立石寺での「閑さや岩にしみ入る蝉の声」、越後路での「荒海や 佐渡によこたふ 天河」などは殆どの人に親しみのある句である。



立石寺の句碑「閑さや岩にしみ入る蝉の声」

奥の細道の旅をしているうちに、折角だから旅行記としてまとめようと思うようになった。しかし自分ひとりだけでは途中で挫折してしまいそうな気がして、ブログとして公開すれば励みになると考え、ニフティのココログというブログに、平成十九年から「奥の細道漫遊紀行」の表題をつけて東京深川から千住、草加と奥の細道の順路に従って写真と紀行文をアップしていった。漫遊紀行としたのは奥の細道との関連が無くても、その都度見聞したことも書こうと思つたからである。



黒羽の句碑「行く春や鳥啼魚の目は涙」

複数回訪れた所もある。黒羽にある満開のアジサイの花の中にひっそりとたたずんでいた「行く春や鳥啼(なき)魚の目は涙」の句碑に巡り合ったのは二回目に行つた時である。この句は奥の

細道に旅立つ時、千住で初めて詠んだ矢立て初めの句として知られている。むすびの地大垣も二度訪問した。ここには「蛤塚」という奥の細道の最後の句が刻まれた句碑がある。「蛤のふたみに別(わかれ)行秋ぞ」で、春に千住を出発して百四十日後大垣に着いたのは秋になっていたという感慨と、旅に終わりは無く今から伊勢の二見が浦に新たに旅立つのだという覚悟が詠み込まれた句である。芭蕉は大垣に二週間滞在した後伊勢の遷宮祭を見ようと旅立つのだが、その時詠んだ句で、漂泊の旅人を志した芭蕉の面目躍如たるものがある。



細道最後の句碑「蛤のふたみに別行秋ぞ」

その様なことを含めて、平成二十一年六月に江戸深川から結びの地大垣までの道中すべてをアップしてきた。これで一区切りだと思つたのだが、目を追うことにこのブログを見てくれる人が多くなり、同年九月にはアクセス回数が一万回以上になってしまった。有名人ならともかく普通のブログでこんなに多くのアクセスがあるとは思いません。むしろ、「奥の細道」「芭蕉」のキーワード



大垣むすびの地の芭蕉像

なにも多くのアクセスがあるとは思いません。むしろ、「奥の細道」「芭蕉」のキーワード

ドの大きさに驚いた。しかしブログとは新聞のようなもので、新しい記事がどんどん積み重なっていくので以前のような忘れ去られてしまう。それでは折角の紀行文が生きないので目次を付けてホームページ形式にしようと考え、日立社友クラブの茨城支部のHPの会に入会した。香川講師をはじめ諸先輩たちのアドバイスを受けながら悪戦苦闘した結果、平成二十一年九月に「イバイチの奥の細道漫遊紀行」という名でホームページとしてアップできた。「イバイチ」とはブログの時のペンネームを「茨城一郎」にしたのでその略称を表題の頭に入れることにしたのである。ホームページ「イバイチの奥の細道漫遊紀行」は、一年後の平成二十二年九月に芭蕉の故郷である伊賀上野、墓所のある義仲寺の章を付け加えて完成した。目次があるのでどの章からでも見ることが出来る。今年(平成二十三年)は平成十三年十月に初めて奥の細道をたどる旅に足を踏み入れてから十年目の区切りになる。

昨年から新たに他の旅紀行のページも始めたので、それを含めて更に充実させて行きたい。

